

# 良質材をつくるための枝打ち技術

下呂営林署 焼石担当区 齋藤道雄・今井富夫

小川 保・二村延夫

## はじめに

現在、下呂営林署で生産される人工林ヒノキは、独得の色艶と香りを持ち“東濃ヒノキ”として高く評価されている。

このことから、適切な作業を通じ将来にわたって高品質材を計画的・持続的に供給するため、私たち作業班も仕事に対する熱意と研究心を持って日々の作業に当たっている。

枝打は、無節の柱材及び高級内装材等の高品質材の生産を目的とし、枝打指針に基づき実行しているが、最近、特に良質指向が高まるなか、木材市場において直接収入に結びつく点で、造林作業の中でも大きなウェイトを占めている。言い換えれば枝打の良し悪しが材価に大きな影響を与えといえる。

枝打が普及するにつれて、それに伴う材の変色（ボタン材）が大きな欠点として問題視されてきている。

そこで、今回、枝打技術と道具の面から、ボタン材の少ない安全性の高い枝打とは何かを体験をまじえて報告する。

## 内 容

枝打指針などでは枝の切断位置と枝隆およびボタン材について

- (1) 切断直径4 cmまでの枝は枝隆の有無に関係なく、幹にできるだけ接して平行に切断する。
- (2) 直径4 cm以上のもので枝隆のないものは、(1)に準じて切断し、枝隆のあるものは枝隆の中心より幹に平行に切断する。(図-1)

なお、ここで枝隆とは枝の基部に生ずる隆起したところで、枝が幹に接している部分に幹を形成する養分が余分に与えられるためにできるといわれている。

ボタン材とは、幹に傷ついた場合などに発生する変色及び材部の腐朽のことであり、特に、変色は、枝打時の傷を起点として内側に広がるもので、材の化粧的価値はもちろんのこと、柱材としての価値を著しく低下させるものである。

過去36年にわたり、自分の持ち山を含め数々の山の枝打を実行してきた。その中で枝打サ

ンプルを色々とり、ボタン材の発生状況や枝の切断位置等を観察してきたところ、次のようなことがわかった。

① 幹に傷をつけて打ったものは、ほとんどボタン材となっていた。

特に鋭利な刃物類を使用したものに傷をつけているケースが多く見受けられた。

② 現在使用している道具には、ナタ・オノ・カマ・ノコ・ハサミ等があるが、幹に傷をつけずに平行に接して切断することは技術上困難である。

これらのことから、

③ ボタン材は、枝打を実行したその年に腐朽菌等が枝の芯と辺材部の境をつたって進行していくと思われる。

④ 枝隆も幹の一部と考えられる。そこに傷をつけることは、幹に傷をつけると同様に傷を大きくするため、ボタン材になる可能性が高く巻き込みの面でもマイナスになると思われる。

生長の良い太い枝では、枝の辺材部も広くなることからその危険性は大きい。

以上のことから、枝を打つ時の切断位置が重要なポイントであり、幹や枝隆に絶対傷をつけないことが枝打の大原則であると言える。

## ま と め

次の3点に留意し適期に枝打を実行すれば、必ず投資効果の上がる山づくりが可能であると考えられる。(図-2)

(1) 幹に接して平行に切断することは、枝隆のない枝の場合でも技術上困難なので、ある程度枝が残ることはやむを得ないができるだけ短かく打つ。

(2) 枝隆のある枝は、枝隆と枝の境になる隆起線のところで打つ。

(3) 生長の良い太い枝は、枝の伸びている方向に対し直角に近い形で打つ。

以上のような打ち方をするためには、使用道具の選択が必要になってくる。鋭利な刃物類は平滑な切り口が得られ巻き込みが早く有利であるが、技術上幹や枝隆に衝撃を与えたり傷をつける確率が高いことから、現状では一回目の枝打は替え刃式ノコ・または短い柄のハサミ、二回目は長い柄のハサミを使用することが望ましいと考える。

現在使用されている道具には一長一短があり、何が良いとは言いがたいものの、ノコ・ハサミ類は、残枝の調整ができることと使い易さや安全性の面でメリットが大きいと考える。

今回は調査データも少なく、体験を通しての内容が主体であったが、今後より一層枝打技術の向上に努め、高く売れる良質材を一本でも多くつくるため取り組んでいく考えである。

図-1 枝打指針による切断位置（枝隆のある枝）

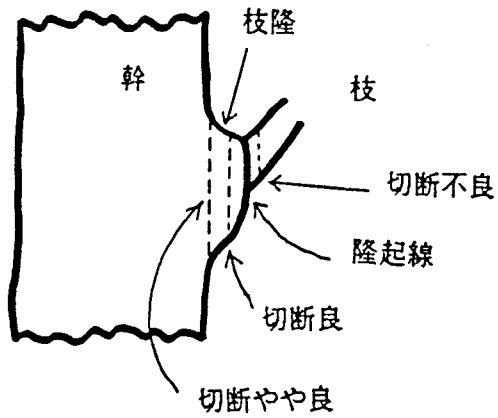


図-2 ボタン材を出さない切断位置

